
確かに恋だった

合砂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

確かに恋だった

【Nコード】

N6420S

【作者名】

合砂

【あらすじ】

平凡な女子高生、明日香。ある朝起きたら乙ゲーヒロインみたいにイケメン遭遇率アップしててしかもゲーム画面みたいに目の前に出される選択肢。いやいや私が好きなのはフツメンのあの子です！
っておい、対象外キャラってどういうことよ！

プロフィール

成績 まあまあ
運動 ふつうぐらい
容姿 平凡

そんな私が通う高校はどこにでもある、というものではなくんだか漫画のネタによくありそうな人間たちのいるちよつと変わった学校だった。

とにかくまあ、イケメンが多いのだ。

しかも生徒会メンバー全員がそうだったりするのだから、現実って怖いと思った。それぞれが俺様だったり腹黒だったりほとんどどこかで聞いたことのあるような設定をもってるらしい。らしいっていうのは、友達から聞いた話だからで本当はどうだか知らない。だって私みたいなのがそんなイケメン集団と係わりもってるわけないでしょう？仲良くなりたりとも思わない。私は私をよーく分かってるつもりだから、その私が片思いしてるのは十人が十人振り返るようなイケメンではなく、身長がちょっと低めだけど爽やかな笑顔にきゅんときちゃうフツメンのサッカー部片岡くんだ。いい子なの、ほんと。

1年は同じクラスじゃなかったけど、今度こそ同じになれたらいいなと思ってた1年の終わり。

今年も平凡で何事もなく過ぎていくんだろうなって思ってた2年の始まり。

結局まあ、そういうものほど簡単に崩れ去っていくのだと痛感した、春、始業式の朝。

プロローグ（後書き）

かなり、亀更新予定です

1 変わらないと信じていた、朝

夢を見ていた。モノクロのようでそうでない、曖昧な夢。

舞台は見慣れた学校。私は制服を着て人でごった返すグラウンドに立っていた。

手の中には深い緑の長い筒。周りにいる人は笑っていたり、泣いたり。

私は一人で立っている。ぽつりと。待っているのだ。

——誰を？

分からない、でも、待っている。人の流れに乗ることもせず、私はその人を待っていた。

言わなきゃいけないことがあって、聞きたいことがあって。すると、誰かが私の名前を呼んだ。

私は、振り返る。

＊

「明日香ー！早起するんじゃないのー？」

コンコンとノックしながらドアを開け入ってきたその声は、すぐ1階に降りていった。

それノックの意味ないよお母さんと呻きながらケータイを手探りで探す。アラーム設定していたはずなのにな、とケータイを開けばそれは物言わぬ睡眠状態。こんな日に限って充電切れてるし。

乱暴に充電器に差込み、ドレッサーの鏡を覗き込む。いつも通りの平凡な顔がそこにはあって、せっかく今日は始業式なんだしこの顔や髪をいつもより気合いいれてセットしてやろうと思っていたのだけれど、まあ向かないってことなんだろうな。

時計はいつも通りの時間を指していた。

小さく溜め息をして1階に降り、顔を洗う。すっきりした顔に化粧水を押し付けていると

朝ごはんのいい匂いがしてきたので着替える前にご飯を食べてしまおうとリビングへ向かった。

「おはよう。早起きするって言ってたからご飯もう出来ちゃってるわよ」

ダイニングテーブルにはスーツを来たお父さんがもうご飯を食べ始めていて、お母さんは今から食べるのか丁度エプロンを脱いでいるところだった。2人におはようと言いかけて、ぴたりと止まる。

・・・変なものが見える。なんていうか、え？何コレ。お父さんとお母さんの頭の上に何か浮かんでいる。まだ寝ぼけているかと思いがしごと目を擦ってもう一度見れば、今度はさっきよりも鮮明に

それが見えた。それは文字で、『攻略対象外』とある。え、何のだよと突っ込みを入れながらもこの夫婦のギャグかと思いい父のそれに手を伸ばす。けれど手をそれをすり抜けてしまった。何度も繰り返し私の手はそれを掴むことができなくて、攻略対象外という文字は父の頭の上に浮かんだままだった。

「・・・どうしたの？お父さんがハゲないおまじない？残念だけど手遅れよ」

「ちょ、母さん?! 気にしてるんだけど! とっても気にしてる事なんですけど! 明日香の優しさが痛い!」

どうやら朝の挨拶もせず父の後ろに突っ立って頭の上に手をかざしてるのをオーラを送ってる的な感じに母は受け取ったらしく、それを聞いた父はめそめそと泣き出した。ごめんお父さん私は力にならない。

「えーと・・・おはよう」

うんとりあえずご飯だ。時間経ったら見えなくなるかもだし、幽霊が見えてるわけじゃないし放っておこう。気にしない気にしないと暗示をかけるよう心の中で呟いた。

ご飯を食べ終わった父はまだめそめそしながら出勤していった。お母さんに、手が掛かる子ねえ、なんて言われながら。さあ食べようと席に着けば、隣りにあるまだ誰も手をつけていない鮭の塩焼きが目に入る。

「あれ、お兄ちゃんは？」

私の隣り、それは3つ年上の兄の席だ。

「昨日バイトの送別会だか歓迎会だかで、帰ってきたの朝なの。まだ寝てるわ」

「はあ。大学生は気楽でいいね。お兄ちゃん、私がちょーっと遅く帰ってきたらすごいうるさいクセに自分は遊びまくってんだから」

むくれてそういえば、

「あの子シスコンだから」

ころころと笑いながら母はそう言った。

私とお兄ちゃんとお母さん、お父さん。仲の良い4人家族藍沢家。いつも通りの朝。いつも通りの風景。けれどそれは少しずつズレていく。

*

朝のラッシュはどうしても好きになれない。

ぎゅうぎゅうに押し込まれたあの小さな空間の中で私どうしても傲慢になれないのだ。私は体をぎゅっと縮めることしか出来なくて、例えば足を強く踏まれていたとしても何かを言うことなんて出来ないし、その足をどけることも出来ない。そのままを私はゴールまで耐えることしかできない。

何本か早い電車に変えたのは1年の夏からだ。春はずっとそれに耐えてたがどうしても、我慢が出来なかった。電車を変えてからは快適だった。早起きにもすぐ慣れた。やはり朝というだけにそれなりには混むが、足を踏まれることはなくなった。運が良ければ座れる日もある。今日は、そうだった。

頭の上に文字を乗せているのは両親だけじゃなかった。駅までの道。電車の中。すれ違う人間みんなにそれはあった。

（なんていうか・・・カオス）

頬が引きつった。けれど頬を叩こうが抓ろうがそれは消えない。夢じゃない。

よくよく観察すれば、その文字はある一定の距離まで近づくと思えるらしい。すれ違い様に見え、振り返ればやけて見えなくなっている、『攻略対象外』の文字。・・・謎だ。頭がおかしくなったかと思ったけれど、本当におかしかったら自分はおかしいという判断も出来ないんじゃないかとも考え付き、溜め息をつくしかない。酔ってないと言う酔っ払い心理だ。

電車という狭い空間では全員分の『攻略対象外』が見える。老若男

女問わず。その文字を視界に入れるのも億劫になり顔を少し伏せ、目的地を待った。

「気分悪いの？大丈夫？」

1駅か2駅か過ぎたとき、その声は頭の上から降ってきた。若い男の人の声。

ずっと顔を伏せてる私が体調不良になったとでも思ったのか声を掛けてくれたらしい。

親切な人もいるもんだなと、顔を上げ大丈夫ですと言おうとした、が。

「・・・え」

びっくりした。今まで黒文字の攻略対象外の文字しか見なかったけれど、それは攻略対象という文字。しかもピカピカとどこぞのネオン街みたく光っている。なんかどぎつい。そして、その攻略対象の文字を頭に乗せていたのは、

「僕の顔に何か付いてる？」

にっこり。漫画ならそんな効果音(?)を描かれてもおかしくないほどの完璧な笑顔。

水無月 礼。同じ高校の超のつく有名人。うちの文化祭で恒例の、

ミスターコンテストやらで1年の部で1位を勝ち取った彼だ。女の子の歓声なのか悲鳴なのかよく分からんものが常に響いていたあの空間は忘れることができない。私はあんまりイケメンだとかに熱狂的になれない方でその異様なノリについていけず、来年は参加しないでおこうと心に誓った。

王子様、と女子は呼んでいる。容姿端麗、勉強もできりゃ運動もできるといいう、これ本当に人間？と思わずにいられない彼。おまけに性格もいい。らしい。1年は別のクラスで一言も喋ったことないからあくまで噂だけだ。

その彼が見の前に居て、しかも頭の上にピカピカの『攻略対象』乗っけてたらず固まる。顔も気になります。頭の上のものがもーつと気になります。・・・言えたらいいが。

「あ、いや、すみません大丈夫です」

ぎぎっと音が出るんじゃないというぐらいぎこちなく首を振り、違う車両に行こうと足に力を入れれば、ぐらりと体が電車ごと揺れた。中途半端な姿勢だったためバランスが取れず、座席のほうにはなく前に倒れた。受身を取ろうと手を伸ばしたがその手は空中を彷徨ったまま。彼が、水無月くんが私の体を支えてくれたのだ。

「気をつけて」

甘い声が耳に溶けて頭がクラクラした。わざとやってるんだろうか。

天然なら尚更タチが悪い。ふんばってもう一度大丈夫です、と言い掛けた私の前に、新しい文字が現れた。

？「触ってんじゃねーよ！」

？「チツ・・・ありがとう」

まるでこの中から今から喋る言葉を選べというかののように目の前に貼り付けられるそれ。ああきつとこれも私にしか見えてないんだろ
うな。しかも何コレ！ろくなのないし！？は人として最低だし？は
思いっきり舌打ちしてるし！助けられた人間の言葉じゃないよ・・・
。こんなの言えるか！と私は目の前に選択肢をスルーし、自分のち
ゃんと礼儀のある言葉を言おうとしたのだがそれは音にならずただ
口がパクパクと動くだけだった。なにこれ気持ち悪い。どうしても
選べというのか。この中から。私は少し考え、このまま無言を決め
込むよりかはいいだろうと、まだましであろう？を選んだ。

「チツ・・・ありがとう」

ああなるべく聞こえないよう舌打ちしたけれど大丈夫だろうかと、
恐る恐る彼の顔を見た。すると目を見開き驚いた顔の彼のバックに
真っ赤なバラが出現し、その花びらが舞った。こう、ぶわっと。周
りの反応から見てこれも私しか見えてない。どんなエフェクトだよ
この居たたまれない雰囲気到我慢ができなくなり（自分が作り出し
ただものだけ）支えられたままの体を引き剥がすと、グッドタイミ
ングで電車は目的の駅に到着した。マジいろいろすんませんと心で
陳謝し、私は電車を飛び出た。

どうせ私はあの高校が女生徒Aみたいなもんだし今後彼に係わることは無いだろうが、こんな形で彼の記憶に残るの不本意だ。ファーストコンタクトがこんなの、なんて。

本当私どうしたんだろう。攻略対象外やら攻略対象の文字が人の頭の上に見えて、攻略対象の人（しかもイケメン）の前では意味わからない選択肢がでてきた。選んだら選んだでバラ見えたし。舞ってたし。最近流行りの乙女ゲームか。・・・そうか乙女ゲーム！このノリどっかで見たことあるなあと思ったらあれか。そーかそーか。

・・・まさか、ね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6420s/>

確かに恋だった

2011年10月8日23時24分発行